

令和元年度第2回結城市認知症施策推進協議会議事録

日 時：令和2年2月26日（水） 19時00分から20時00分

場 所：結城市役所2階 第2・3会議室

1 議 事

- (1) 令和元年度結城市認知症施策 経過報告について
- (2) 令和2年度結城市認知症施策 実施計画（案）について
- (3) その他

3 出席委員（12名／13名）

三岳荘小松崎病院認知症疾患医療センター	宝 谷 奈 美
結城病院 内科	山 口 恵 子
結城病院 リハビリテーション部	川 口 淳 一
結城病院 看護部 手術・中材室	大 西 恵 子
城西病院 リハビリテーション部	森 洋 輔
城西病院 看護部 内科病棟	倉 持 裕 子
結城市地域密着型サービス事業所連絡会	足 海 弘 俊
茨城県介護支援専門員協会結城地区会	野 村 美 香
結城市社会福祉協議会	池 羽 修 一
結城市民生委員児童委員協議会	長 瀬 裕 一
結城警察署 生活安全課	浅 野 哲
認知症の人と家族の会 茨城県支部	牧 野 優 子

4 傍聴人

0人

5 事務局

保健福祉部	部長	本 多 武 司
介護保険課	課長	山 本 賢 司
長寿福祉課	課長	成 瀬 和 恵
長寿福祉課長寿支援係	長寿支援係長	石 島 英 明
地域包括支援センター	所長	稲 葉 龍 也
〃	係長	宇 都 木 由 紀 子
〃	主任	諸 信 孝 子
〃	主任	谷 嵩 敦 子
〃	主幹	高 嶋 仁 志
〃	主幹	小 川 直 子
〃	主幹	福 井 由 布 子
地域包括支援センター南分室	分室長	野 村 幸 代
〃	看護師	佐 藤 栄 子
〃	社会福祉士	木 立 雅 人
在宅介護相談センターたけだ	相談員	高 橋 史 創
在宅介護相談センターヒューマン・ハウス	相談員	星 野 佳 代

<審議内容>

議事(1) 令和元年度結城市認知症施策 経過報告について

ア 事務局説明

配布資料に基づき説明。

イ 発言

牧野委員：結城市の人口、高齢化率において、結城市認知症初期集中支援チームの対応者2名、結城市徘徊高齢者等SOSネットワークの事前登録者数8名は適当な人数なのか。または、予想より少ないのか。

数字の背景には、介護サービス等を必要としている人がおり、本来は対象となりうる数字があったうえでこの数字なのか、という点が気になった。

川口委員長：初期集中支援チームに関して介入に至らないケースはあるか。

事務局：相談を受けた段階で内容より医療・サービスに繋げるようにしている。しかし、繋がらないケースもあるが定期訪問等により継続した把握に努めるようにしている。

川口委員長：定期訪問により状態の変化を把握しておき、タイミングで繋げるようにしているということ。そのようなケースは何件ぐらいあるか。

事務局：今年度の相談・対応件数等の集計はしていないため現時点での正確な数字は回答できない。

川口委員長：初期集中支援チームとして専門的な支援が必要なケースが2件ということ。しかし、チーム対応の判断基準を広げることも必要かもしれない。

川口委員長：SOSネットワークの事前登録者8名という数字は、高齢者人口に対して少ない。伸び悩んでいるのか。

事務局：徘徊に関する相談は年々増えていると感じる。その相談を受けた際に、SOSネットワークや茨城県発行、おかえりマークを都度説明させていただいている。

しかし、家族が利用するのをためらってしまうケースが多いため、数字は伸びない。

牧野委員：初期集中支援チーム、SOSネットワークなど認知症のケースに関して、把握しきれていないケースが多いと災害弱者であるため、対応等が遅れて大変なのではないかと考える。

事務局：認知症施策に関して、まだまだ地域に周知しきれていないと考え、潜在されているケースが多いのも事実である。地域の支援者である民生委員や関係者に認知症施策を周知し、市が把握していないケースに関して地域包括支援センターに相談が入る体制を強化していきたい。そのために次年度は普及啓発をより実践していきたい。

森委員：認知症カフェについて、実績をみると当事者含め多くの方が参加されているが、参加者は固定されているのか、毎回違う方が参加されているのか。

事務局：固定された方が多い。しかし、認知症に関する相談等を受けた際に案内し、単発的になるが来られる方もいる。

川口委員長：認知症カフェに参加した。認知症の方の遊びは失敗しない、エラーがないのが前提となる。参加した際は、歌で日本を一周するようにし、参加者で方角を話しあった。他、色カルタを行い、テーマの色を選んでいただき、理由を話していただく。個人の表現なので失敗することはない。また、お互いのリアクションが刺激になる。

宝谷委員：認知症疾患医療センターで今年度初めて認知症カフェを開催した。結城市のように楽しい雰囲気を作るのが大変難しいと実感している。子供やボランティアの参加などあるようだが、世代を超えて集まれる場をつくるにあたって特別な声かけなどしているのか。

川口委員長：私の子供たちを連れてきた。子供たちから参加者が広がればとも考えている。また、当日は知的障害者の参加もあったようだがどうしているのか。

事務局：認知症カフェに協力してくれる方の事業所が障害分野の事業も経営しており当日参加に繋がった。

川口委員長：参加したときには、高齢者だけが楽しめるプログラムにしておらず、世代を超えて楽しめるように配慮した。

川口委員長：SOSネットワークで市内において1件、対応事案があったが、協力事業所はどのような動きをしたのか。

事務局：発生した際には、搜索依頼書を作成し、協力事業所へ送付する。協力事業所はその情報を事業所内の職員に周知し、訪問や送迎などの際などに業務に支障がない範囲で搜索に協力していただくようお願いしている。

川口委員長：情報を流し、一定期間経つと情報が薄れてしまう。再度情報を流すタイミングはどれくらいか。

浅野委員：警察でも早急に対応したケースである。大体、1カ月後ぐらいに再度情報を伝達するのが良いと考える。

警察に寄せられる行方不明者届において、認知症のケースは少ない。あっても数時間後に発見されるケースが多い。

川口委員長：長期的に発見されないケースは、再度情報を周知することが必要と考えられるため、そのフローを検討することが必要ではないかと考える。

議事（2）令和2元年度結城市認知症施策 実施計画（案）について

ア 事務局説明

配布資料に基づき説明。

イ 発言

野村委員：介護予防教室の参加者はどのような人か。

事務局：65歳以上の市内在住の高齢者、その家族が対象者である教室であるため、介護認定の有無にかかわらず、誰でも参加できる教室となっている。

川口委員長：老健などでは、認知症短期集中リハビリテーションを実施している。そのセラピストを教室に活用しても良いのではないかと考える。

山口副委員長：患者様の相談を受ける際には、その人の生活状況に踏み込む必要がある。初期集中支援チームに限らず、様々な相談に乗っていると思うが、対象者の生活状況を理解したうえで、良いタイミングやきっかけで何かしらのサービス等に繋げることは難しいと思う。実際の個別対応をする、前の段階の認知症ケアや認知症カフェなどのちょっと足を運ぶことができる活動を通して、認知症の方を把握し関わりを持ち、スムーズな対応ができるようになると良い。現在、初期集中支援チームの活動に留まっているが、認知症カフェなどに参加していきたい。

認知症の関わりには、ステップがあり、そのステップごとに色々な専門職などが関わるチームアプローチが必要である。皆さんの協力をいただきながら、対象者の方々が病気を治すということではなく、その人にとって良い生活、生き方が送れるように、皆さんと一緒に一人でも多くの方が認知症であってもその人らしく生きていけるサポートができればと考えている。

川口委員長：初期集中支援チームがいきなり来ても家族の重荷になる場合がある。その前段階でのステップで認知症カフェや講演会などがあるので上手く活用していくと良い。もっとスモールステップとなりうるものが多くできると良い。

長瀬委員：SOSネットワークにおいて、民生委員は地域の身近な相談支援者であるため、この事業において、何か働きかけは行っているのか。

川口委員長：民生委員は地域情報を持っており、連携していくことは非常に重要である。

事務局：現在は連携が取れていないが、今後は繋がれるようにしていきたい。ただし、検索依頼を出す際は、メールやFAXで個人情報流すことになる。そのため、適切な方法を検討して民生委員児童委員連絡協議会に協力を依頼したい。

川口委員長：認知症を理解していく、皆で支え合っていくという町づくりのノウハウは他の疾患にも通ずることであり、活かされていくこと。そうすることで、市全体としてやさしい町になるので、ぜひ今後とも御協力をお願いしたい。

議事（４）その他

ア 発言

事務局：結城市認知症施策推進協議会の委員任期は２年であり、３月３１日までとなっている。今後も協議会は継続していきたいと考えているため御協力をお願いしたい。

_____ 終了 20時00分 _____